

松本の七夕人形

美谷島いく子

ど、ワイルドは、この部分も大事な要素として含めて「星の子」の話を仕立てたに相違ない。人間としての完成を経てなお、その苦しみは大きく試練は烈しかったのだろう。本当の安らぎは、この世を去って後、神の御元でのみ与えられるのだろうか。いや、それさえも私が見知らぬ文化に寄せてみる甘やかな解釈にすぎないのかもしれない。ワイルドの目はもっと厳しくこの世をみつめ、人の成長をとらえているのではないだろうか。その厳しさは、凍てついた冬の森に落ちてくる一筋の星の光のように、私にはキラリと輝く問いのまま投げかけられている。

(東京学芸大学)

私の幼い日の七夕祭

松本の夏の空は、抜けるように透き通つて青く、高く澄み渡る。王ヶ鼻に入道雲がわき立ち、夕立が来る直前に、竹藪を渡る涼やかな風の音を聞いていると、幼い日の七夕祭のことが蘇つてくる。

松本では七夕祭は、月遅れの八月六日・七日に行われる。

蔵の軒下には、竿に干された、薄緑色の干びょうが風になびき、坪庭の池の水は、百日紅の大木を映して、桃色に漣立つていた。

六日の朝「七夕様を飾る」と言つて、神の依代となる笹竹を、裏の竹藪から祖父に切つてもらい、字が上手になるようと早起きして集めた里芋の露で磨った墨で、短冊に願い事を書き、紙縁にして笹竹に結び付け、広縁の軒下に繩を張り、七夕人形を何体も吊した。短冊を飾った笹竹は、風にさらさらと音をたてて揺れ、軒先の七夕人形の牽牛星と織女星が、天から舞い降りてきたかのよう、風に舞つていた。

牽牛と織女の形をした男女一対の木製の七夕人形に、「七夕様に着物をお貸せする」（「貸小袖」）と言つて、母が、私と弟の絹の一つ身の着物を着せて飾ると、華やいで、今年も七夕様がきたと嬉しかつた。七夕様に着物をお貸せすると、着物の襟数が増え、着物に不自由しない、裁縫が上達する、子宝に恵まれる、子どもが病気をしない等々の幸運を授かるという。

和紙の上衣と袴の紙雛の男女一対の七夕人形も吊す。
その両端に、「川渡り」「川越し」「足長」と呼ばれる、ユーモラスな顔の、足の長い木
製の人形に、着物を尻挟み（裾を端折る）して着せて吊す。「七夕に、たとえ三粒でも雨
が降つたほうがよい」という伝承があり、雨天の場合、「川渡り」や「足長」が、織女を
背負つて牽牛の所まで、天の川を渡るのである。



▲ 私と弟の着物をお貸せした七夕人形

七夕人形は、七夕籬とも言われ、初子が生まれた家へ、初七夕の折に、羽根親、仲人、親類から「生まれた子どもが健やかに成長すること」を祈って贈られる。私の家の七夕人形は、父の姉（夭折）に山辺林（はざわら）の伯母から贈られたものである。この山辺や北安曇郡小谷村では、明治末まで、集落が共同で、男女対の七夕人形を部落の入口へ飾り、祭祀が行われていたが、今では、個々の家毎の行事になっている。今は、七夕人形贈答の風習もすたれてしまつたが、人形店街の高妙町（小安寺小路）で買い求めることはできる。

広縁には、机を置き、夕顔、胡瓜、西瓜、南瓜、大角豆等の蔓の伸びる野菜や、桃、葡萄等の初物の果物をお供えした。篩、箕（くわ）、枊（ひよし）も、豊作を願つて供えた。七夕様に御馳走を供えに行くのは、子どもの役目で、食事毎に、できたての、ほうとうや饅頭を、心弾ませて七夕様にあげに行つた。

六日の夜は、公民館で花火大会が催された。帰り道、頭上に天の川が横たわり、彦星、織姫星、北斗七星が、大きく輝いていた。

七日は、盆始めて、朝涼しうちに、分家の人は一緒に墓の掃除を行つた。

八日の朝、私は、近所の子どもと一緒に、「七夕様を送る」と言つて、笹竹とお供え物を持って「けみ」と呼んでいた近くの川へ、七夕様を流しに行つた。北安曇では、紙の七夕人形を、流し籬のように、川へ流したり、「眠り流し」と言つて、眠氣も一緒に川へ流す。

松本の商店街では、六日、七日の夕方、浴衣に赤い櫻掛けの少女達が、鬼灯提燈を携え、次の「盆々」の歌を歌つて町内を練り歩く。

七夕様よ、七夕様よ、

七夕様は無理なことをおしゃる。

柳に駒をつなげとおしゃる。

つながばつなぐ遠慮なく。

つながばつなげホイホイ

(六九町内史)

松本の七夕人形

松本城わきの日本民俗資料館には、江戸時代から松本地方に伝わる「七夕人形コレクション」総数四十五点があり、国の重要民俗資料に指定（一九五五年）されている。

私は、それを初めて眼間にした時、子どもの頃から、「七夕様」と呼び親しんでいた、目に見えない神が、こんなにも様々の姿態の人形となつて具現化されて、眼前にあることに驚いた。

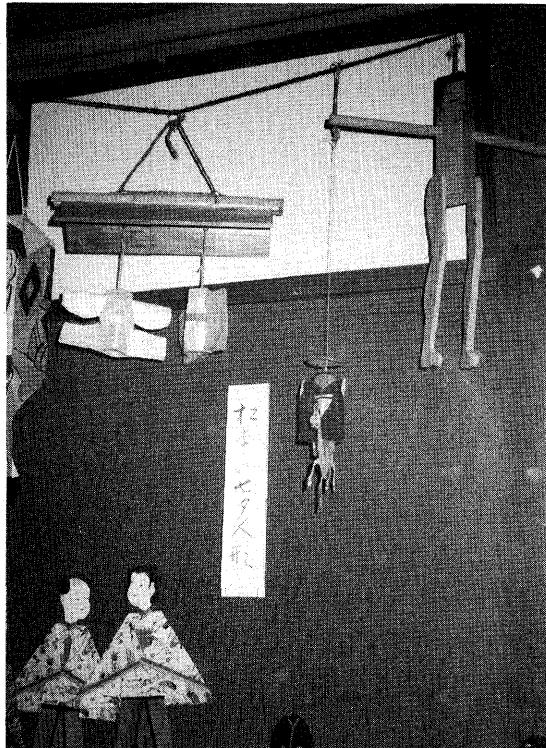
例えば、袴の芯に、髪を結った髪と、子どもが書いたであろう稚拙な顔、赤紙に青紙を

◇◇◇◇◇・特集＜星・七夕＞◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

重ねた着物の十五cm位の女の流し雛形の人形。

木の頭と胴に、大祓の人の紙の着物を重ねた三十cm位の男女一対の人形。五色の着物は、年々新しく貼り重ねられ、二十数枚にも及ぶ。

杉板と竹で屋根形の祠を作り、その中に吊された角材に顔を描き、男は青、女は赤の紙の着物の十cmにも満たぬ素朴な一対の人形。



▲ 七夕人形コレクションから

角材の頭に、髪、眉と目が墨書きされ、鼻と口は刻み目を付け、水浅葱の絹の定紋入りの羽織、茶の袴の三十cm位の男丈の人形。

天驅ける紙の白馬に跨った、貫頭衣風の紙の着物に、日傘をかぶった木の人形。迎え馬に乗り、七夕様が天降る姿であろうか。

七夕の宵を明るく彩つたであろう、竹ひごに和紙を貼つた奴燈籠もある。

私は、それまで、七夕人形と言えば、貸小袖形と紙雛形しか知らず、買い求めるものと思っていた。しかし、昔は、七夕祭が近づくと、子どもも、大人も、想像力を自由に羽ばたかせて、このような七夕様の人形を作り、五色の色紙や模様の千代紙で、年毎に新たに装いをさせ、軒先に吊して、願い事をしたのである。

七夕人形を飾る風習は、『真澄遊覽記』(天明三年、著者菅江真澄著)に、「六日より、軒はに高なる木にて、めおのかたしろを造りて糸に曳きはえてけり」と絵入りで記されている。他に『嬉遊笑覧』(文政十三年、喜多村信節著)松本藩水野氏時代の記録『松本御代記』等にも記されており、江戸中期には行われていた。

信濃という古い国名の由来のひとつに、信濃は「志奈斗」であり、風を司る風の神(級長津彦神、級長津姫神)からくると言われ、信濃は風と縁の深い場所である。

私は、東京から信濃に帰り、風の声の聞き分け方や風の色の見分け方を知っている幼い

娘達と生活するようになつてから、季節は、風と共に、秘かに廻りくると感ずることがある。

七夕は、夏と秋との交叉祭。ゆきあい 作物を豊かに実らせる神秘的な力を持つ、初秋の風の吹き始める時である。

信濃は松本の七夕人形を飾る風習は、現実的な着物の虫干しの意味の他に、着物に付いた目に見えない穢れを、そして身の穢れをも、七夕人形に託して、秋風に吹き祓つて、厄落しをしてもらい、子どもの健やかな成長や、秋の豊穣を祈つたのであろう。

たなばたのうれしからましあしたより
いのり日ぐらしもろ声にして 真澄

(松本市在住・舞々同人)

